

里山里海自然学校'06同行記

能登のNPO と手を結び さらに広がる 体験活動の輪

夏休みも終わりに近づいた8月下旬、輪島市門前町深見の海岸で、元気に磯を走り回り、海に飛び込む子どもたちの姿があった。「タコがいるよ! こっちこっち!」「いっせーのーで、ジャンプ!」。金沢大学とNPO法人などが初めて開催した自然体験教室。いきいきとした子どもたちの姿を追うとともに、活動を通して浮かび上がる課題を報告する。 社会貢献室研究員 中村 晃規



掃除、洗濯や食事の準備も子どもたちが分担した

8月23日から25日までの3日間
にわたって開催されたのは、「里山
里海自然学校2006夏能登教室」。
小学2年生から6年生までの30人
が合宿形式で参加し、夏の思い出
づくりに励んだ。
参加者のうち29人は金沢市内の
小学生で、里山では昆虫採集やア
リの調査、夜には鳴く虫の観察や
星空観察、海では磯の生き物観察
や自作の竿で魚釣り、海水からの
塩づくりなど盛りだくさんのプロ
グラムを楽しんだ。3日間とも好

自然体験教室は、金沢大学「角
間の里山自然学校」と能登地域の
活性化に取り組むNPO法人「能
登ネットワーク」、そして金沢子ど
も科学財団が手を結んだ初めての
事業だ。

タウンミーティングで NPOが支援を求める

天に恵まれ、子どもたちは豊かな
能登の自然にどっぷり浸かり、充
実した表情を見せていた。

「金沢の子どもたちに能登の自
然を知ってもらいたい。我々は能
登の自然を体験するプログラムと
フィールドを準備できます」。平成
18年3月に開催した能登町でのタ
ウンミーティングで、能登ネット
ワーク事務局長の岡本紀雄さんが
金沢大学に協力を求めた。大学に
は角間の里山自然学校の活動実績
と、そこから生まれた強いネット
ワークがある。
企画の骨子はすぐに固まった。能
登ネットワークと里山自然学校が
具体的な計画を立て、金沢子ども
科学財団に参加者募集の協力を求
めた。子ども科学財団と里山自然
学校は、年間キャンパスでの自然
体験学習を毎年共催するなど協力
関係がすでに確立している。
大学では大学院生から講師も募

子どもたちは芝生の広場にひい
たゴザやビニルシートに仰向けに
寝転がり、一斉に懐中電灯の光を
消した。「うわあ」。誰からともな
く、ため息のような声が漏れる。
目の前に広がる一面の星。金沢で

貴重な体験重ねた 金沢の子どもたち

り、ボランティアアサークルに学生
の派遣を依頼した。こうして3者
が共催する初の自然体験教室が生
まれた。

子どもたちは能登の大自然を満喫した





星空観覧会。夜空には無数の星が輝いていた



釣り竿を自作する子どもたち



磯に並んで魚釣り。垂れた釣り糸を見る目は真剣

は街の明かりにかき消されるかすかな光も、1個の星としてしつかりとした輝きを放ち、空一面を埋め尽くしていた。

これほどの数の星を見たのは生まれて初めてという子どもがほとんだったろう。「あちらに白く帯みたいに見えるのは何ですか。雲、それとも霧？」と子どもが指さす先を見てスタッフが答える。「天の川や。金沢ではなかなかここまで見えんやろ」「うそお、上げえ！」ポカンと口を開け、天の川を見つめる子どもたち。空を照らす光がないため、はつきり見えるその姿を星の集まりとは思えなかつたのだらう。

手作りの竿で釣果を競う 体験活動の醍醐味を満喫

「さあ、出発するぞー！」。ノコギリを持ったスタッフの後ろに列を作り、子どもたちが歩く。目指すは合宿所近くにある「メダケ」

の林。翌日の魚釣りに備え、釣り竿になる竹を取りに行くのだ。お目当ての場所に着くと、スタッフが次々にメダケを切つて渡していく。渡されたメダケを吟味する子どもは真剣で、まるで「魚が釣れるかどうかは、この竿選びにかかっている」と言わんばかりだ。一夜明けて魚釣りの本番。海に向かつて30本の手作り釣り竿がずらりと並んだ。「エサはこれだよ」とスタッフが見せたのはこのあたりで「シタダメ」と呼ばれる小さな巻き貝。ちよつと周りを探せば、磯の岩にたくさんくっついている。「これを右でグシャッとつぶして、中身を針につければ、できあがり！」。「そんなので本当に釣れるの？」と半信半疑の子どもが聞いた。「それは君らの腕次第」、「ふうん。まあ、頑張ってみるわ」。

若手指導者育成へ向け 養成講座の開講計画も

約30分後、「うわあ、釣れた釣れた！」とうれしそうな声があちこちから聞こえてきた。釣れた子どもたちは満面の笑み。釣果が上がらない子どもたちは、大きいエサに取り替えたり、エサをいくつもつけたり、いろんな貝を使ったりと試行錯誤を繰り返している。スタッフが釣れない子どもたちに言う。「みんなが釣れたら面白くない。釣れたり、釣れなかつたりするのが面白いんや」。それこそが子どもを熱中させる仕掛けであり、自然体験の醍醐味なのだ。子どもたちは真っ赤に焼けた顔を海面に向けてながら、魚釣りを満喫していた。

み、目には見えない「夏休みの宝物」を持ち帰ったようだ。

この様子はテレビでも紹介された。番組を見た子どもの保護者からは、「子どもたちがうれしそうにチャレンジしているのを見て、これが子どもの本来あるべき姿だと感じました。ウチの子もすごく楽しかったみたいで、目を輝かせていっぱい思い出話をしてくれました。ここで経験したことは、この子たちにとって一生の宝物になると思います」と感謝のメールも届いた。そのほかにも、保護者からの声が続々と寄せられ、能登半島での自然体験教室は大きな反響を呼んだ。

活動には課題もある。自然体験活動の指導者、特に講師をサポートする人材が不足しているのだ。角間の里山自然学校の活動では指導者1人に対し、参加者が30人を超えることも珍しくない。そのため、細かい部分にまで目が行き届かず、十分な指導ができないことも多い。

この問題を解決するため、角間の里山自然学校と能登半島里山里自然学校（本誌3ページ参照）では、県内の大学生、短大生を対象にした「里山里海リーダー養成講座（仮称）」の開講を計画している。計画では、集まった学生が4日間、CONE（コン・エヌ・ピー）法人「自然体験活動推進協議会」のリーダー養成カリキュラムに沿った講義、実技を受講する。約250団体に参加するCONEは、指



図鑑の使い方も教わった

導者が活躍できる仕組みづくりを柱に、自然体験活動の普及に取り組んでいるNPOだ。

CONEのカリキュラムで自然体験活動指導者としての基礎を学んだ学生は、両自然学校から「里山里海リーダー」に認定されると同時に、CONEの「自然体験リーダー」の資格も得ることになる。修了後は両自然学校のほか、県内団体の事業情報を里山里海リーダーに提供して参加協力を促し、さらに実際の現場で経験を積む。このようにして、県内の自然体験活動を支える一翼となる人材を育成していこうというのだ。

若いリーダーが増えていけば、ニーズが高い能登地区での自然体験活動はさらに充実する。若手の人材不足は、自然体験活動に取り組む多くの団体が抱える慢性的な悩みではあるが、若手人材の発掘と育成をこまめに続けていけば、県内の自然体験活動全体の底上げにもつながっていくだろう。子どもたちの笑顔を増やすためにも、たゆまぬ努力が欠かせない。